

CSRと環境と未来と

おわりに

一人でも多くの良識ある経営者の理解を求めたい、一つでも多くの企業に正しい取組みを始めてほしい。

～TBLの熱意です～

お問い合わせは

トリプルボトムラインLLP
〒460-0016
名古屋市中区橋1-17-28
TEL052-321-8711
FAX052-321-8712

CSR5つのはたらき

1. 開かれた会社をつくる
2. 風通しのよい会社をつくる
3. 活力を生み出す会社をつくる
4. 社会をよくする会社をつくる
5. 地球環境をよくする会社をつくる

TBL^{LLP}

トリプルボトムラインLLP

Mail: info@tblllp.com

URL: http://tblllp.com

TBL^{LLP} TRIPLE BOTTOM LINE Limited Liability Partnership トリプルボトムライン有限責任事業組合

TBLip CSRはは ステークホルダーとは CSRイニシアティブ チーフレポート



ディーセンシーのすゝめ

ディーセンシー dearscy は、時と場所と立場(身分)によって、礼儀正しい、上品な、きちんとした、見苦しくない、情み深いなどという意味があります。ありがたがらしい、入るころ、といたら分かりやすいかもしれません。人のこころにそれさえあれば、そう正論をまちがうことがないということ。CSRの時代といわれる今日、このこころを一つこころに持ってほしいものです。きっと、いままで見えなかったものが見えてきます。

Copyright (C) TRIPLE BOTTOM LINE Limited Liability Partnership. All rights reserved.

☆編集室から

CSRニュースレターVol.004をお届けします。次回は2008年1月1日発行予定です。ニュースレター各号は、配布用pdfを用意しています。ご入用の方は、Mail: info@tblllp.com までご連絡ください。

企業の自立

CSRニュースレター 2007・10・01

Vol.004

特集 会社とはなにか

～営利とはなにか、価値とはなにか、規範とはなにか～

価値合理性と目的合理性

マックス・ヴェーバーは、価値合理性と目的合理性ということをいっています。合理性(Rationality)とは、非合理的な伝統(tradition)からの解放ということ。ま

ちがつても、リストラのことではありません。資本主義とは、これら合理主義者たちにより、社会・経済・政治・芸術・文化のすべての面での合理化を推進して成立した世界とするのです。

その上で、価値合理性とは、めざす価値と思考・行為との整合性、目的合理性とは、めざす目的と手段・選択との整合性です。

～ここまでを今回のイントロダクションとして、先に進みます。

会社は営利組織か

さて会社とはなにか、企業とはなにかときくと、たいていの人は営利組織と答えます。その通りでなくとも意味するところはだいたい一緒です。

それは、会社員、その他の社会人とも同じなのですが、すこし現実から遠い学生、家庭人となると、より明瞭に、会社は利益が目的とか、儲け主義・利益主義とか答えます。

勤め人である会社員は、それだけじゃないような気がするのですが、煎じつめれば利益は目的に違はなく、漠然とした違和感はとりあえずそのまま放置してしまいます。

みんな、中途半端ですね。

今月の学ぶ

学ぶ企業が勝者となる。

常に学び続ける企業でありたいと願っている。

企業の究極的な競争による成功には、その企業が学ぶ能力を持ち、学んだものを実践に置換えていくことが必要である。

～ジャック・ウェルチ～



アキニレ(秋楡)
ニレ科ニレ属の落葉高木
大気浄化能力A、大気汚染
抵抗性Aの環境樹木です。
葉が小さく、細かく
遠景からは、印象派の
点描画を見ているかの
ようです。

ホンネ・タテマエという固定観念

でも、学生は、会社は利益をのみ追求してほかに関心はないのだ、と思つて就職するのでしょうか。会社員は、自社の目的はひたすら収益の向上だ、と信じて、日々仕事に身を挺するのでしょうか。

だれもそんなことはかり思つてはいません。思つているのは、ただ、世の中にはホンネとタテマエがあるのだという固定観念です。中途半端なのは、それで納得できたかのように感じていることですね。

社是、経営理念の功罪

しかし、会社におけるこのホンネとタテマエという固定観念を助長してきたのは、じつはほかならぬ会社の側です。

たとえばいまでも経営者がよくもちだす、社是とか経営理念がそれです。

いわく「産業人たるの本分に徹し、社会生活の改善と向上を図り、世界文化の進展に寄与せんことを期す」

これはある電器メーカーの綱領ですが、要点を網羅して、たいていの会社の社是などもこのような内容になっているものです。

これはこれで有用ですが、経営者はここでは、会社の営利にも利益にも言及していません。

利益と金儲けという妄言

ところが、このメーカーの創業者は、「社会に役立つことが、金儲けになる」「モノづくりを通してつくって売って利益をだして社会に貢献する」というそれこそホンネを、つねづね公言していました。

ホンネは「ちうらだとわざわざ宣言しているようなものです。

どこでボタンを掛け違えたのでしょうか。

～ここで、金儲けとか利益を、と言っていること、説明抜きでそれだけを言っていることが大きな勘違いなのです。

営利と利益との隔絶

営利と利益ということばは、はつきり区別してつかうべきです。そもそも、このふたつは意味がまったく違います。

営利とは利を営むことであり、営むとは「暇いとまなし」が転じたもので、利をつくり、配り、資して再び利をつくるという行為です。文字とおり再生産行為なのです。ちなみにそれは、営為が「暇なく為(な)す」として、生業なりわいを意味するのと同様です。業なす、すなわち事業、仕事のことですね。これももうひとつの再生産行為です。

会社は歴とした営利組織であり、営利というかぎりは、なにをもはばかるころはありません(この認識は大事です)。

したがって、先に問題としたのは営利のことではなく、利益のこと、つまりまるところ会社は利益至上主義ではないかという問題提起なのです。

そしてホンネでいうところの利益とか金儲けとかも、ただストレートに利益至上主義とみられてしまつていくことなのです。

会社は営利組織である (利益至上主義ではない)

会社が営利組織である理由は、もうそこにあります。

会社の利益は、だれか一人がこれを独り占めして、しかも自分のためにのみ使うとすれば、そのとき利益至上主義となります。近代産業資本主義成立以前の、いわゆる商業資本主義の時代ではそういうことがもつてらでした。

現在の会社はそうではなく、まっとうな経営をするかぎり、どんな会社でも利益は、供給業者に、社員・役員に、株主・投資家に、政府・行政(税)に、地域社会還元(設備投資に、ユーザー・消費者開発)に分配されます。

そうして分配される利益は、利益でなく付加価値といわれています。

この観点をもつかぎり、じつは会社のすべての費用も投資も税金も、ひとしく付加価値として、再分配される対象にほかなりません。

営利と付加価値との不整合

さて、ここで、マックス・ヴェーバーに戻ります。

営利と付加価値はともに価値であり、めざす目的でもありますが、先のヴェーバーのいう価値合理性にならつていえば、そこに、めざす価値(付加価値)と思考・行為(営利)との整合がちゃんと成立しています。

したがって、こんどは目的を達成するにあつて、めざす価値を損なうような手段が選択されると、その手段はそこで直ちに目的と整合しなくなります。

特集 会社とはなにか

〜営利とはなにか、価値とはなにか、規範とはなにか〜 つづき

たとえば、節税などというのは、その具体例です。節税という手段は利益につながるりますが、納税は、政府・行政を通じて社会全般へ資する正当な還元にはなりません。この手段は価値を損なうのです。

分配関係者への配慮

さて、ここからが次のテーマですが、価値合理性と目的合理性をひこころから整合していくというプロセスは、いったいどういう行為でしょうか。

これまでの営利と付加価値という視点からは、まず分配関係者への配慮というのが欠かせません。

CSRの今日、それは、ステークホルダー(関係者)への配慮と呼ばれます。それは価値と目的との不整合をおこす手段をとらないようにするという行為をともないます。

もうひとつ、営為(生業)という価値がありますが、営為の視点からは、製品・サービスそのものへ配慮が欠かせません。

これらの価値を守る行為を、規範といひならわします。

ここで、ここでひとつ肝心なことがあります。

楕円の資本主義

さて、並行して、営利の対となって営利をもたらす行為が、先にふれたように、営為(生業)すなわち事業にはなりません。その営みもまた営利と並んでもうひとつの価値であり目的でもあるものです。

もともとマックス・ヴェーバーが近代産業資本主義の認識モデルを考えたとき、それは当初から復中心(ふたつの中心)をもつ楕円のカタチをしていました。

ひとつの中心が営利(企業)であり、もうひとつの中心が産業(経営)でした。そして、産業(経営)には、生産と労働と市場という場があり、企業には会計資本計算という機能をともなっていました。

いま、これを営利付加価値と営為(生業)といひならわすことにします。

現在の資本主義と会社を俯瞰するとき、営利と営為(生業)というふたつの中心をもつ楕円、ふたつの価値観をもつ現代資本主義という実態を再認識すること、それは、ものごとをこれまでよりシンプルにわかりやすくするはずで

これらはすべて会社の行為にほかなりませんが、そこに法律をはじめ、道徳とか社会通念とか、入りこんでくる余地がないことです。

規範とはなにか

CSRは社会的責任ということから、だれでも、会社を守るべき規範が会社の外からくるといったものにみえます。

しかし規範とは、そんなことではありません。先のように価値を守る行為を、規範といひならわします。

価値があり、価値を認め、価値をめざすという、その行為そのものが、自ら立て、自ら順守していく規範の行為にほかなりません。

規範の自然発生、これを自律といいます。自律とは自主独立すなわち自立にほかなりません。

これに対して他律があります。

法律・道徳・社会通念

他律とは、自分の外に存在するものです。法律、道徳、社会通念です。それらは、どういふものでしょうか。

営為(生業)とはなにか

営利と並ぶもうひとつの価値である、営為(生業)についてふれておきます。

それは、社の全員がいわば献身して行なう仕事、事業分野です。その生み出す生產品が市場を通じてユーザー・消費者に供給され、ユーザー・消費者が対価を支払つてその効用を享受します。

それが商品goodの本来の意味ですが、効用すなわち役に立つとはどういうことかが、会社にとっては至上の永続的テーマです。それが使命であり、会社の存在理由でもあります。ヴェーバーが天職といったものがこれです。

するとユーザー・消費者の安全を損なうようなことはもちろん、無用な浪費とか散財とかを助長するかもしれない商品も市場に出さないようにというようなポリシーも併立します。

この項は次回につづきます。

価値と絶対性

最後にこうした価値そのものは、絶対的なものとして変化することはありません。時代で変化するのは事実判断なのであって、価値もしくは価値判断そのものではありません。



アキニレの枝葉

たとえば他律である法律とはつくられるときは正義の概念をもちます。しかし稼働するときは、原理的に人の内にある良心とか倫理とかとは切り離されています。

このことは、立ち止まつて、ちよつと考えてみればわかります。

つまり法律を守るのにとりあえず内なる良心は駆り立てられません。従うか従わないかは人それぞれの自由です。その切り離れた代償として、制裁ということが付帯するだけです。

法律の限界

したがって、露見しなければ法律は破つてもいいと考えるのも、ある面自然なことでしょう。逆に自然だから抜本的に予防できないのです。

法令順守の号令が空回りする理由もこれです。

ごく普通のおとなが、法律の抜け道を探して、法律に触れていないからかわらない、責任はないはずだ、と詭弁を弄するものもこれです。

そういう限界がありながら、人はじつは無意識に他律をもとめます。規範を国や社会や世間においておきたがります。その方が便利だし、自分で考える必要がないという理由です。